# 詩集
# Moon Lovers
# Ⅲ

たかはしみどり

# Moon Lovers Ⅲ

たかはしみどり

表紙：ぱくたそ

## blue moon

こうして夜空を見上げるなんて
ずっと忘れていた気がする
今夜はほんとに夜空がきれいだね
こんなに青い月を見てると
深い　深い闇の中から
誰かが大きな手を出して
救ってくれそうな気がする
怖くて震えそうな闇だけど
心の深くまで染み込んでくる
ずっと　遠くから
いつでも私を見つめてる
闇の中で青く輝く月は
私のすべてを知っている
冷たいようでやさしい
青い光が私をつつむ

# 無題

行き詰って　前が見えない
助けを求めたくても　声にならない
泣きたくても　涙が出ない
そんな時　少し立ち止まってみる
後ろを振り返るわけじゃない
何も考えなくていい
ただ少しだけ　勇気を出して
見えない明日に　一歩を踏み出す
そうすれば　道は開ける
そう信じること
必ず　道は開けると

# 砂時計

不思議だね
時間は一方にしかすすまない
あの日に　あの時に　戻れたら･･･
誰もがそう望むのに
時は容赦なく
静かに　音もなく
さらさらと流れてゆく

たとえば　もし
時をさかのぼることが　できるなら
君たちと過ごした　あの日々に･･･
でも　僕の意思に関係なく
時は確実に
静かに　音もなく
さらさらと流れてゆく

# 向い風

いつもいいことばかりじゃないよ
だれだって　そう　辛いときはあるんだ
それでも　僕らが頑張れるのは
その後に来る　喜びを知っているから
たとえ　今が　どんなに強い向い風でも
いつか　風向きは変わるから

いつも楽しいばかりじゃないよ
だれだって　そう　苦しいときはあるんだ
それでも　僕らが笑顔なのは
みんなが同じように　耐えているから
たとえ　今が　どんなに長い上り坂でも
いつかは下る道だから

たとえ　今が　どんなに暗い闇の中でも
いつか　必ず朝は来るから

# 月の涙

夜空に輝く小さな星たち
あれは　月が流した涙
僕たちの住む　この星で
悲しいことがあるたびに
月は一つ　涙をこぼす
あれは　月の涙のしずく
僕たちの星が　平和で
幸せであるようにと
あんなに美しく輝いてるんだ

## for get me not〔勿忘草〕

あの日の約束を覚えていますか
いつまでも一緒にいると
あなたは言ってくれました
でも　もうあなたはここにはいない
わたしは一人　ここにいる
今　わたしの手の中に残っているのは
あなたの手のぬくもりと
ふたりで植えた　勿忘草

どこへ行っても　何を見ても
あなたの思い出がよみがえる
そんな辛い日が続くと思った
でも　もう私は辛くない
いつまでも心は縛れない
今　わたしの手の中に残っているのは
あなたとの思い出と
ふたりで植えた　勿忘草

あなたを心の奥にしまいましょう
忘れるわけではありません
ただ　前を向いて歩きたいのです

# 光を求めて～海に沈んだ心～

深い　深い海の底
月のない夜よりも暗い
光が恋しくて
恋しくて　恋しくて
呼びかけるけど　届かない
かすかに聞こえる光の声
“帰っておいで　こっちだよ”
声をたどって泳いでいくけど
いつも海の底に棲む闇には
光はまぶしすぎる
いつまでたっても闇の声は
光には届かない
闇が光を求めるとき
海は深い　深い青に染まり
光が闇に手を差し伸べるとき
海はキラキラ輝く

# 真昼の月

青い空にぽっかり浮かぶ
ひとりぼっちの真昼の月
たったひとつの私の願い
もしも聞いてくれるなら
あなたの光の一部でいい
弱くて小さな私を照らしておくれ
空に輝く陽の光は強すぎるから
あなたの優しい光に包まれていたい

青い空にひっそり浮かぶ
ひとりぼっちの真昼の月
だれが気付いてくれるだろう
雲の陰でかくれんぼ
そんな真昼の月のように
誰かが目を留めてくれるのを待とう
そしていつか眠りについた街を照らす
夜空に光る月のようになろう

# 心の手　つないで

一瞬ふれた　指先がささやいてる
一人は淋しいと

あなたのその淋しげな目が
ぼくにそう思わせた

あなたがこの闇にまぎれて
消えてしまうような気がした

ぼくはいつも　あなたのそばで
あなたのことを　見ているよ

あなたの心が悲しみで
打ちひしがれてしまった時は

ぼくはそよ風のように
あなたを優しく抱きしめる

もしも　人ごみにまぎれて
あなたを見失ったとしても

ぼくは　必ず
あなたを見つけられる

目を閉じて　耳をすませば
いつでもあなたの声が聞こえるから

ぼくとあなたの　心の手は
ずっといつまでも つながれてるから

強くにぎりしめた　あなたの手は
小さくて　冷たかった

あなたのすべてを　受け入れよう
ぼくはそう思ったんだ

あなたがこの闇の中に
消えてしまわないように

ぼくがいつも　隣を見ると
あなたがいつも　いてくれる

あなたの心が悲しみで
いっぱいになってしまわぬように

ぼくは春の光のように
あなたをそっと包み込む

もしも　あなたが悲しくて
涙があふれてしまっても

ぼくは　必ず
あなたに笑顔をあげられる

目を閉じて　耳をすませば
あなたの心にぼくの声が届くはず

ぼくとあなたの　心の手は
ずっといつまでも つながれてるから

# 月光

月のない夜の暗闇を
一人で行くのは怖いから
月のように優しく
そして冷たい光を私に注ぐ
心の闇まで照らしてくれる
あなたを心に住まわせた
私の上に降り注ぐ
優しい光　いつまでも輝いて

手からこぼれる水のように
私の心をすり抜ける
心を照らす月をなくして
涙はこぼれて星になる
引き止める術は何もなく
あなたの上に月の光を祈るだけ
いつも心に月があって
道を間違えぬようにと

## missing

人は生まれたその時に
にぎりしめた小さな手の中に
幸せを持っているという
そして　手を開いた瞬間に
逃げてしまった幸せを
探し出すため歩き出す

ぼくたちが生まれたこの星は
不安と孤独の闇の世界
すべてをリセットしてしまおう
何もかも終わりにしよう
いっそ終わりにしてしまおう
雪と共に溶けてしまおう

ぼくが存在する意味も
虹の向こうの希望もない
自分さえ信じられない
どうか涙は闇にまぎれて
ぼくの上に落ちてこないで
悲しみの涙は流さないと決めたから

ぼくが涙を流すことがあるなら
その涙は海に沈めよう
ぼくが海に沈んでしまおう
笑顔の裏に隠した心の涙は
だれにも見せてはいけない
笑顔をなくしてしまうとしても

## Moon letter

この淋しさは　きっと消えるよ
私は　君の心に棲んで
君が淋しいときは　いつでも
君の心を　照らしてあげる
だから　君は一人じゃないよ
月から注ぐ　優しい光
孤独なボクを　そっと包み
ボクに　静かに語りかける
それは　月からの手紙

この悲しみは　いつか忘れる
私は　全部知ってるよ
君を　いつも見ているから
君の涙は　すべて残らず
私が　飲みつくしてあげる
光を集めて　蒼く輝く
下弦の月から　こぼれる涙
ボクの心に　しみわたる
それは　月からの手紙

## PASSAGE

あなたは　覚えていますか
あの日の　約束
聞かせて　あなたの気持ちは
今も　変わらないと
歩道に落ちた影を　見つめては
ため息をつく　あなたの瞳　悲しくて
あなたの目に　私はもう
映ってないのね

あなたのいない　この部屋は
少し　広すぎて
私は　窓際に座り
空を　眺めてる
夕日が落ちて　夜が襲うとき
朝は二度と　訪れないような気がするの
私は　寒い部屋で
一人で眠るわ

朝日が射して　窓を開けたとき
朝もやの中　一筋の光が見えた
必ず　朝はやってくる
今日を　生きるため
前に　進むため
だから　あなたに　さよなら

# 幸せさがし

少女は毎日　この森へ来る
何のために　森へ？
それは少女が幼い時に
手放してしまった　幸せをさがすため
朝早く　霧のたちこめる中
今日も少女は　やって来る
朝露の中に　隠れていないかと
幸せさがしに　やって来る

ある時は　木漏れ日の中
降り注ぐ光に　隠れていないかと
夕闇　涼風の中
風が運んで来ないかと
雨の中　少女は来る
空から降って来ないかと
少女は一人　森へ来る
幸せさがしに　やって来る

それは　満月の蒼い夜
少女は　一人の少年と出会う
この少年も　幸せさがしに
毎日　森を訪れた
やっと見つけた　二人の幸せ
二人がつないだ　手の中に
しっかり握り締めている
二度と　手放すことのないように

# Moon Lovers Ⅲ

http://p.booklog.jp/book/58932

著者：たかはしみどり
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/midri7911/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/58932

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/58932

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ